

## 書陵部蔵『土御門院御集』(抄出本)について

山崎桂子

一

『土御門院御集』の諸伝本のうち、一本だけ形態を異にするものがある。夙く、和田英松氏が『列聖全集』解題で、「始に土御門院御歌とありて、五十七首を載せたり。部立もなく、歌題をものせざるものなり。他に類本なし。」と指摘され、『群書解題』（橋本不美男氏執筆）にも、異本として触れられている。また、有吉保氏は『私家集大成中世I』解題で『土御門院御集』の諸本を、

- (1) 『私家集大成』底本と同系統で、A・Bの二歌群から構成される。A歌群は一から二七六番までの二七六首に家隆識語がついたもの。B歌群は、二七七番「此以下以他本書加之」から四四九番までの一七三首。

(2) (1)のA歌群のみに「土御門院御百首」を加えたもの。

- (3) (1)のA・B二歌群に「土御門院御百首」を加えたもの。  
(4) 全歌数五七首で、(1)と四五首、「土御門院御百首」と一五首が一致し、独自の歌はない。  
と、分類されているが、この(4)にあたるのがそれである。(但有吉氏の記述の「四五首」は「四二首」と改められるべきである。)

この書陵部蔵にかかる一本は、有吉氏の指摘どおり独自歌はなく、御集と御百首からの抄出本と考えられ、僅か五七首で資料的価値は無いかの如く思われる。ところが、御集の諸伝本を調査していくうちに、この抄出本が重要な意義を持つことが判明したので、ここに翻刻を行い、併せていささかの考察を試みるものである。

二

○この本の書誌は次のとおりである。

宮内庁書陵部蔵（五〇六・六四）

旧禁裡本。列帖装一冊。縦一七・二cm、横一六・一cm。表紙は

鳥の子で、梅花文（灰色）を押し、銀箔を散らす。本文料紙は

鳥の子。外題は、靈元天皇宸筆で打ち付けに「土御門院御集」。

内題は「土御門院御哥」。墨付八丁。一首二行書き。一面八行。

奥書なし。所収歌数五七首。近世書写。

○次に本文を翻刻する。

歌頭に番号を付し、下段にその歌が御集と御百首の何番の歌であるかを記す。御集は『私家集大成』所収本である書陵部蔵（五一・九）智仁親王筆本により、御百首は『統群書類従』所収本によってその番号を記す。また、翻刻にあたって、異体字「哥」「妹」はそれぞれ「歌」「秋」になおした。

土御門院御歌（内題）

- 1 いそかれぬ花の比こそあはれなれ  
なけきのもとに春はへぬれと  
（御集20）
- 2 時わかぬ涙はそてにおもなれて  
かすむしらす春のよの月  
（御集115）

- 3 おもひやる井手の山吹さかりにも  
みやこにすまはあはまし物を」1才  
（御集29）
- 4 ときしらてすくすうき身のかひもなく  
今日とてはるの衣かへめや  
（御集31）
- 5 むかしをは花たちはなに忍ひてん  
ゆくすゑをしる袖のかもかな  
（御集39）
- 6 さみたれのふるき思ひのはれすのみ  
なかむるかたは山のはもなし  
（御集38）
- 7 霧にむせふ山のうくひすいてやらて  
ふもとの春にまよふころ哉」1ウ  
（御集14）
- 8 すまのうらいはうつ浪の音はして  
人をとむるせきはなかりき  
（御集10）
- 9 あまをふねとふ人あらは藻塩たれ  
みなみの海に侘とこたへよ  
（御集6）
- 10 きりくす過にし秋やしのふらん  
ふるき枕のしたになくなり  
（百首52）
- 11 けふはまたたかゆふくれの別そと  
あきのわかれのをしかなくなり」2才  
（百首55）
- 12 をしなへてしくれしまてはつれなくて  
あられにおつるかきは木のもり  
（百首58）
- 13 霜かれの野へのくす葉のこむちして  
（御集293）

- うらむるかひもなしや世中  
 14 いろかへぬ竹のまかきの朝かほも  
 おのれはあたの花にそありける  
 (御集58)
- 15 難波江やすみうきさとの芦の葉に  
 いとゝしもおく冬のあけほの「2ウ  
 わすれめやおもかけさそふ晨明の  
 袖にわかるゝよこくもの空  
 (百首75)
- 16 なみたちるそてにたまゝくすの葉に  
 秋かせふくとゝはゝこたへよ  
 (百首80)
- 17 かたしきの涙のかすにくらへても  
 暁しけしきのはねかき  
 (百首81)
- 18 いはかねのこりしく山の椎柴も  
 色こそみえね秋かせそふく「3オ  
 をはたゝの宮のふる道いかならむ  
 たえにしのは夢の浮橋  
 (百首86)
- 19 ゆふくれは我すむ山のあき風も  
 たれをともなくまつにふく也  
 (百首95)
- 20 むはたまのさめても夢のあたなりと  
 いやはかなる袖のつゆかな  
 (百首97)
- 21 はるの花秋のもみちのなさけたに  
 うき世にとまる色そまれなる「3ウ  
 (百首98)
- 22 吹風のめにみぬかたをみやことて  
 24 しのみもかなしゆふくれの空  
 (御集1)
- 23 むかしたれすみけむ跡のすて衣  
 25 いはほのなかに苔こけのこれる  
 (百首84)
- 24 わかおもふことの数をかそへは  
 26 ゆふくれのなからましかはしら雲の  
 (御集4)
- 25 うはのそなる物はおもはし「4オ  
 まくすはふあたのおほ野になく虫も  
 (御集5)
- 26 ひとつうらみの秋のゆふくれ  
 27 きゝわかぬまぎのいた戸のねさめかな  
 (御集62)
- 27 木葉ふるよも敷ふるよも  
 28 夢ならて又やかよはんしらつゆの  
 (御集69)
- 28 おきわかれにしまゝのつきはし  
 30 わかれてもいく有明をしのふ覧  
 (御集86)
- 29 契て出しふるさとの月「4ウ  
 31 しほたるゝ袖こそあらめあまのすむ  
 (御集87)
- 30 うらみよとてのみるめなりけり  
 32 おほかたの秋になくさむおもひたに  
 (御集89)
- 31 我身ひとつとあすやなりなん  
 33 あかつきをうしとおもひしわれしもそ  
 (御集90)
- 32 (御集91)

- ことしはいたく寝覚かちなる
- 35 高圓やあれのみまさる宮のうちに  
のこるむかしの庭の松かせ「5オ
- 36 うきふしのしけき物からくれ竹の  
かはらぬ色そつれなかりける
- 37 いは枕こけのさむしろうちはらひ  
あたにもすくる我月日かな
- 38 山ふかくすむにもよらぬ心かな  
つらき世をのみ猶忍ひつゝ
- 39 うき世にはかゝれとてこそむまれけめ  
ことはりしらぬわかなみたかな「5ウ
- 40 人とはぬあさちか原のあきかせに  
こゝろなかくも松むしのこゑ
- 41 かりのくるそなたの空をなかもめても  
思ひつきせぬみねのあさ霧
- 42 人めよりやかてあれにしわかやとの  
あさちか原そむすはゝれゆく
- 43 つらしとて人をうらみんゆへそなき  
我こゝろなる世をはいとはて「6オ
- 44 あふさかの関のわらやは跡もなし  
秋のしらへを松にのこして
- (御集 389)
- (御集 297)
- (御集 294)
- (御集 290)
- (御集 129)
- (御集 109)
- (御集 96)
- (御集 94)
- (御集 93)
- 45 いとつらくなる世中もいとはれて  
うき身にゝたるわか心かな
- 46 つのくにのなにはかくれぬ弓張の  
はつかの山にのこる月かけ
- 47 鐘のをとによもきか露そをきまよふ  
とよらの寺の秋のゆふくれ「6ウ
- 48 やへむくらしけき思にとちはてし  
あとをはかれす秋はきにけり
- 49 わかれちにをふるくすはの露みれば  
きえぬたくひもまたしられけり
- 50 うつもるゝこのはかしたのみなしくり  
かくてくちなん身をおします
- 51 すきの門さゝんとまてはおもはねと  
とふ人なしにこけとちてけり「7オ
- 52 冬かれのよもきかもとのきりくす  
いけるはかりはけにそかひなき
- 53 かけろふのをのゝ草葉のかれしより  
あるかなきかとゝふ人もなし
- 54 たにふかみふすゐのかるもかき絶て  
なれしみやこそうとくなり行
- 55 みよしのゝはなにわかるゝかりかねも
- (御集 298)
- (御集 390)
- (御集 392)
- (御集 313)
- (御集 315)
- (御集 326)
- (御集 328)
- (御集 334)
- (御集 336)
- (御集 351)
- (百首 13)

いかなるかたによるとなくらん」7ウ

56 あかしかた山としまねもみえさりき

(御集101)

かきくもりにし袖のまよひに

57 ゆふくれはまかきのおきに吹かせの

(百首43)

めにみぬ色をしる涙かな」8オ

三

この本の内題が「土御門院御歌」とあるのは象徴的で、諸本の多くが「土御門院御集」とするのに対して、土御門院の歌を選んで集めたとの意であろう。抄出状況をまとめてみると、

御集 A 歌群 二七首

B 歌群 一五首 } 四二首

御百首 一五首 } 五七首

となつてゐる。抄出本であることは、この本に収めるこれらの歌が成立時期を異にする御集と御百首中の歌を、前節の翻刻の如く混在させていることから明白である。

では、この本の抄出の意図は何であらうか。御集の歌も御百首の歌も共に題詠歌であるので、各歌の御集と御百首中での歌題を調べると、

- 1 桜
- 2 春月
- 3 款冬
- 4 更衣
- 5 蘆橋
- 6 五月雨
- 7 鶯
- 8 寄閑述懐
- 9 寄海述懐
- 10 虫(秋)
- 11 九月盡

- 12 籬
- 13 冬
- 14 槿花
- 15 寒蘆
- 16 後朝恋
- 17 恨

18 暁 …………… (以下略)

となつており、一見、春の歌から季節を追って並べられているかの如くみえるが、必ずしも、四季・恋・雑の部立順に配列されているわけではない。また、詠出年次順でないことも確かである。

そこで、所収歌の内容を見ると、述懐性の濃い詠が集められているらしいことに気付くのである。例えば、冒頭三首を見ても、

いそがれぬ花の比こそあはれなれなげきのもとに春はへぬれどの、「なげき」は掛詞で、「嘆き」ながら春を経てきたと詠む。

時わかぬ涙は袖におもなれて霞むもしらず春の夜の月 (2)

は、常に涙する身であることを言う。次の歌、

思ひやる井手の山吹さかりにも都に住まば逢はまし物を (3)

は、「都に住まば」と望郷の思いを詠んでいる。この他にも、『増鏡』に引かれて人口に膾炙している、

うき世にはかくれとてこそ生まれけめことほりしらぬわが涙かな

などが選ばれている。(39)

などが選ばれている。

周知のように、土御門院は、承久の変によって阿波(始め土佐)に流され、寛喜三年(一一三一)その地で没した。御集は、この配流後の作品であり、集全体に配流の境遇を嘆き、望郷の思いを綴っ

た歌が多く、述懐性が濃厚である。恐らく、この本の抄出にあつたの基準はこのあたりにあつたものと考えられる。

但し、もう一つの資料である御百首は建保四年（一一二六）三月の作で、配流前のものである。従つて先述の基準はあてはまらないことになるが、配流や望郷の詠ではないものの、この基準から大きく逸脱しない範囲の歌が、やはり御百首からも選ばれていると見てよいのではなからうか。基準というよりは、抄出者の好みといった方がよいかもされないが。

#### 四

ところで、この抄出本のもとになつた御集と御百首は、いかなる本であつたのか。抄出本の歌で、御集から抄出された四十二首について、御集内のどの歌群からのものであるかを、更に詳しく調べてみると次のようになってゐる。『私家集大成』所収本の歌群に拠つて示す。番号は抄出本の歌番号。

#### A 歌群

##### ① 詠述懐十首和歌

8 · 9 · 24 · 26 · 27

##### ② 詠百首和歌

1 · 3 · 4 · 5 · 6 · 7  
14 · 28 · 29 · 30 · 31 · 32  
33 · 34 · 35 · 36 · 37 · 38

##### ③ 詠二十首和歌

2 · 40  
39 · 56

#### B 歌群

##### 秋五首

41

##### 冬五首

13 · 42

##### 雑十首

43 · 45

##### 草名十首

48 · 49

##### 木名十首

50 · 51

##### 虫名十首

52 · 53

##### 獸名十首

54

##### 名所秋

44 · 46 · 47

これによると、A 歌群からは①詠述懐十首和歌、②詠百首和歌、③詠二十首和歌から抄出されていて、それ以降の④詠五十首和歌から⑥詠歳暮多風雪までの部分からは一首も歌が採られていない。また、B 歌群からの抄出も全体にわたつてゐるわけではない。抄出されていない部分には、抄出の意図に叶う歌がなかったのかと言つて、それでもなさそうである。例えば、A 歌群の⑦詠五十首和歌には、をしめども老ばかりこそつもりけれあすはみそちのかずならぬ 身も (御集番号 233)

あかざりしみやこをこふる涙こそつひにこしちの雪ときえしか (御集番号 237)

夢にだにまたみしまえのあしのはに都恋しき袖のあめ哉 (御集番号 238)

などの歌がある。

すると、抄出本がもとにした御集は、現行の『私家集大成』本の  
ような形ではなかったとは考えられないだろうか。つまり、抄出本  
が採歌していない部分は、もとにした御集にも無かったのではな  
らうか。

このことを裏付ける伝本が一本存在している。日本大学総合図書  
館所蔵にかかる、重要美術品『土御門院御集』一帖である。伝坊門  
局筆の鎌倉中期書写本で、正徹の奥書を持っている。坊門局筆はと  
もなく、御集の成立時期に非常に近い時期の写しであり、貴重な伝  
本であることは、言を待たない。本稿冒頭で、土御門院御集の伝本  
で、形態が異なるものは、抄出本のみであるように記したが、実は  
この日大本も、現行の御集に対して異本とも言うべき伝本なのであ  
る。日大本の存在は、『弘文莊目錄』等で早くから知られており、  
『新編国歌大観』解題で寺島恒世氏も触れておられるが、全体を紹  
介されたものは未だ無い。この本の詳細については別稿（注）で紹介して  
いるので、ここでは抄出本との関わりについてのみ触れたい。

この日大本は、現行の御集とは次の点で異なっている。

一、冒頭に御百首を持ち、その御百首は、現行の御百首が持つ定  
家の評詞や裏書等の付載文を持たない。

二、現行の御集全てが持つA歌群の家隆の評詞、識語を持たない。

三、A歌群、B歌群双方にわたって、現行の御集のある部分を欠  
いている。

このうちの三について、抄出本と比べてみると、抄出本の採歌して  
いる歌はすべて日大本に含まれ、不採歌部分は日大本の欠いている  
部分、つまり日大本にない部分からは一首も歌が採られていないの  
である。そして、日大本では、B歌群内の配列が現行本に比べて乱  
れているのだが、抄出本のB歌群からの抄出順（抄出本歌番号で41  
から54まで）が日大本の配列に従っていることが認められる。

また、一についても、抄出本が御百首と御集という別々の二資料  
から採歌したのではなく、すでに両者がまとまった形態の資料から  
採歌したと考えると、日大本は恰好の原資料であったと思われる。  
（勿論、先述の如く現行本の御集にも、御百首を付載するものがあ  
るのだが）。

## 五

本節では、抄出本と日大本の本文異同について考えてみたい。ま  
ず、御百首から抄出された歌について。御百首から抄出された歌は、  
僅か十五首であるが、この十五首について日大本御百首の本文と抄  
出本文を比べてみると、異同があるのは、次の四箇所のみである。

11 けふはまたたかゆふくれの別そとあきのわかれのをしかなく  
なり

わかれ——なこり（日大本）

25 むかしたれすみけむ跡のすて衣いはほのなかに苦（日本書紀）のこれる

の——そ（日大本）

55 みよしのゝはなにわかるゝかりかねいかなるかたによると  
なくらん

に——へ（日大本）

57 ゆふくれはまかきのおきに吹かせのめにみぬ色をしる涙かな  
色——秋（日大本）

11の「わかれ」と「なこり」であるが、これは日大本の「なこり」が正しい。抄出本の「わかれ」は、上句にある「たかゆふくれの別ちと」の「別」字にひかれての誤写であろう。抄出本の本文では同じ語が一首中に重複してしまふ。

25は、抄出本の親本の表記が既に「の」となっていたもので、日大本そのものが抄出本の親本ではないことを窺わせる例である。次の55は、「てにをは」の問題である。

問題となるのは、57の場合であるが、「吹くかせのめにみぬ」の表現は、土御門院の好んだ表現である。抄出本文の「めにみぬ色」はずなわち「秋色」と考えれば、意味は通ずるように思われるが、やはり、ここは『古今集』敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えぬども風の音にぞおどろかれぬる」を踏まえた日大本の「秋」本文が本来的な形であり、抄出本は誤写から生じた本文であろう。

ところで、土御門院御百首の伝本はその数膨大で、百本近い状況である。活字として見られるのは、『列聖全集』所収のものと、

『統群書類従』所収のものがある。谷山茂氏が『群書解題』で述べられているように、定家の裏書や家隆の手紙などの付載文の有無の違いはあるものの、百首の本文における本来的な歌の有無といった大きな異同は、管見の限りでもないようである。そこで、御百首の伝本の中から、御小松院宸筆本を以て書写したという本奥書を持つ宮内庁書陵部蔵の伏見宮本（伏九一）と、永祿八年冷泉為益の奥書を持つ内閣文庫蔵本（二〇一・三四五）とを、抄出本と比較してみるとどうであろうか。

抄出本の十五首について異同をしらべてみると、抄出本と日大本に対して、伏見宮本と内閣文庫本は共通した異文を持つことがわかる。その数は、細部にわたるものも含めて十一箇所である。その中で、例えば、

21 ゆふくれは我すむ山のあき風もたれをともなくまつにふく也  
たれをともなく——たれとはなくて（伏・内）

也——こゑ（伏）——声（内）

この歌の下句は「たれをともなくまつにふく也」でも「たれとはなくてまつにふくこゑ」でも、どちらでも良いように見えるが、「誰も訪れることのない寂しい私の山家のある、この山の秋風も、やはり夕暮時となると誰を待つということもなく、松風の音をたてて吹くよ」の意で、日大本と抄出本の本文のほうが良質で古態を保っていると言えよう。



また、次の例では、

23 はるの花秋のもみちのなさけたにうき世にとまる色そまれなる

はるの花——花の春(伏・内)

初句と第二句が「はるの花秋のもみち」と対句になっているのであって、日本本・抄出本の本文が良質であること同前である。

以上のことから、当抄出本は、近世の書写にかかるものであるが、異同数とその内容から見ても、伏見宮本や内閣文庫本系の御百首から抄出したものではなく、明らかに日本本系の御百首からの抄出であることが本文の上からも確認できたかと思う。

次に、御集部分からの抄出歌について、日本本との近似性を検討してみたい。御集部分からの抄出歌四二首のうち、日本本との異同箇所は十箇所過ぎない。抄出本の誤写から生じたと思われる箇所を除くと、問題になるところは少ない。そこで、『私家集大成』所収の智仁親王筆本の御集を併せ用いてみると、次のような興味深い例が出てくる。

24 吹風のみにもぬかたをみやことてしのふもかなしゆふくれの  
空

かなし——くるし(智仁親王筆本)

抄出本・日本本共に「かなし」とする第四句を、智仁親王筆本は「くるし」とする。意味的にはどちらでもよさそうであるが、現行の御集伝本がすべてこの部分を「くるし」としていることから考え

て、日本本と抄出本の現行諸本に対する関係を端的に示した一例である。

30 夢ならて又やかよはんしらつゆのおきわかれにしまゝのつき  
はし

まゝの——まゝの(智仁親王筆本)

この歌の異同「まゝ」と「まの」は、いずれも歌枕である。「まゝ」は、下総国の真間で「真間の継橋」として歌に詠まれている。「まの」も、撰津国須磨の歌枕であるが、「真間の浦の淀の継橋」と詠まれるのが一般である。「真間の継橋」は、慈円の、

かつしかや昔のまゝのつき橋をわすれずわたる春霞かな

(拾玉集七九二)

や、定家の、

忘れぬまゝのつき橋思ひねにかよひしかたは夢に見えつゝ

(拾遺愚草一一七五)

の歌のように、「昔のままの真間の継橋」「忘れぬまゝの真間の継橋」と掛詞で詠まれる歌枕である。30の歌は「逢不遇恋」題で、「白露の置く朝に、起きたままで夜を明かして、あなたとお別れしたままの真間の継橋を」との意であろうから、日本本・抄出本の本文「まゝ」が正しい。智仁親王筆本は、撰津の歌枕「真野」にひかれた誤写であろう。

56 あかしかた山としまねもみえさききくもりにし袖のまよ

ひに

袖——そて(日大本)——そら(智仁親王筆本)

この例は、「そら」本文の方が良いのだが、異同の状況から見て、日大本と抄出本の親本にあたる本が、「そて」か「そら」か紛らわしい書き方になっていたのであろう。抄出本は「そて」と読み、日大本は危うく「そて」と読みそうになったが、「そら」と訂したのではなからうか。

## 六

土御門院御集の現存諸本のうちで、日大本は最も書写の古い本であるから、御百首の伏見宮本や内閣文庫本、御集の智仁親王筆本、そして、この抄出本にとつても親本的位置にあり、良質な本文を伝えていことはもちろんである。しかし、日大本は現行の多くの御集とは形態的に異なった伝本である、本稿で、取り上げた抄出本が、近世書写にかかる本でありながら、その抄出は、現行の御百首や御集からではなく、日大本の本——今のところ、この日大本一本しか確認できないが——からの抄出であることを証したかったのである。また、抄出本も、存在が知られるのはこの書陵部蔵の一本のみで、抄出の時期や抄出者等については不明のままであるが、日大本或いは日大本系の伝本の流布状況を探って行くことによって解明に努めたい。

〔注〕

(注1) 「土御門院御集の成立について——日大本を中心に——」(掲

載誌未定)

(注2) この他に、御集冒頭の一首(詠述懐十首和歌)の「寄風述懐」題で、

ふく風のめにみぬかたをみやことしてしのぶもくるし夕暮の空

と、詠まれている(この歌は抄出本の24にも入っている)。

この歌については、樋口芳麻呂氏が「『土御門院御集』の歌——」詠

述懐十首和歌」を中心に——(『愛知淑徳大学論集』第12号、昭和

62年1月)で触れられている。

(注3) 『列聖全集』『統群書類従』とも、活字で見られる点では便利なの

であるが、本文的に最善本とは言いがたい点もあるので、使用には注意

が必要である。

(注4) 『拾玉集』『拾遺愚草』は、『新編国歌大観』により、表記は私意

による。

〔付記〕 「土御門院御集」(抄出本)の翻刻を許可された宮内庁書陵部に感

謝申し上げます。